

【B年】公現後第2主日(2023年1月15日)

## 【旧約聖書日課】出エジプト記 18章13～27節

<sup>13</sup>翌日になって、モーセは座に着いて民を裁いたが、民は朝から晩までモーセの裁きを待って並んでいた。<sup>14</sup>モーセのしゅうとは、彼が民のために行っているすべてのことを見て、「あなたが民のためにしているこのやり方はどうしたことか。なぜ、あなた一人だけが座に着いて、民は朝から晩まであなたの裁きを待って並んでいるのか」と尋ねた。<sup>15</sup>モーセはしゅうとに、「民は、神に問うためにわたしのところに来るのです。<sup>16</sup>彼らの間に何か事件が起こると、わたしのところに來ますので、わたしはそれぞれの間を裁き、また、神の掟と指示とを知らせるのです」と答えた。<sup>17</sup>モーセのしゅうとは言った。「あなたのやり方は良くない。<sup>18</sup>あなた自身も、あなたを訪ねて来る民も、きっと疲れ果ててしまうだろう。このやり方ではあなたの荷が重すぎて、一人では負いきれないからだ。<sup>19</sup>わたしの言うことを聞きなさい。助言をしよう。神があなたと共におられるように。あなたが民に代わって神の前に立って事件について神に述べ、<sup>20</sup>彼らに掟と指示を示して、彼らの歩むべき道となすべき事を教えなさい。<sup>21</sup>あなたは、民全員の中から、神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物を選び、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長として民の上に立てなさい。<sup>22</sup>平素は彼らに民を裁かせ、大きな事件があったときだけ、あなたのもとに持って来させる。小さな事件は彼ら自身で裁かせ、あなたの負担を軽くし、あなたと共に彼らに分担させなさい。<sup>23</sup>もし、あなたがこのやり方を実行し、神があなたに命令を与えてくださるならば、あなたは任に堪えることができ、この民も皆、安心して自分の所へ帰ることができよう。」<sup>24</sup>モーセはしゅうとの言うことを聞き入れ、その勧めのとおりにし、<sup>25</sup>全イスラエルの中から有能な人々を選び、彼らを民の長、すなわち、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長とした。<sup>26</sup>こうして、平素は彼らが民を裁いた。難しい事件はモーセのもとに持って来たが、小さい事件はすべて、彼ら自身が裁いた。

<sup>27</sup>しゅうとはモーセに送られて、自分の国に帰って行った。

## 【使徒書日課】使徒言行録 16章6～15節

<sup>6</sup>さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。<sup>7</sup>ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。<sup>8</sup>それで、ミシア地方を通ってトロアスに下った。<sup>9</sup>その夜、

パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに願った。<sup>10</sup>パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったからである。

<sup>11</sup>わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、<sup>12</sup>そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリビに行った。そして、この町に数日間滞在した。<sup>13</sup>安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。<sup>14</sup>ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。<sup>15</sup>そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。

## 【福音書日課】ルカによる福音書 5章1～11節

<sup>1</sup>イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。<sup>2</sup>イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。<sup>3</sup>そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。<sup>4</sup>話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をきなさい」と言われた。<sup>5</sup>シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。<sup>6</sup>そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。<sup>7</sup>そこで、もう一そうの舟にいる仲間合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。<sup>8</sup>これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。<sup>9</sup>とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。<sup>10</sup>シモンの仲間、ゼベガイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」<sup>11</sup>そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 出エジプト記 18章13～27節

13翌日になると、モーセは座に着いて民を裁いたが、民は朝から晩までモーセのそばで立って待っていた。14モーセのしゅうとは、彼が民のために行っているすべてのことを見て、言った。「あなたが民のためにこうして行っていることは何ですか。どうしてあなた一人が座に着いて、民は皆朝から夕方まであなたのそばで立っているのですか。」15モーセはしゅうとに言った。「民は、神に尋ねるために私のところに来るのです。16彼らに問題が起こると、私のところにやって来ます。私は双方の間を裁き、神の掟と律法を知らせます。」17しゅうとはモーセに言った。「あなたのやり方はよくない。18あなたも、一緒にいるこの民も、きっと疲れ切ってしまう。これではあなたに負担がかかりすぎ、一人でそれを行うことはできない。19さあ、進言するので、私の声に耳を傾けなさい。神があなたと共におられるように。あなたが民のために神の前に出て、彼らの問題を神に述べなさい。20そして、あなたは掟と律法を彼らに示し、彼らの歩むべき道となすべき行いを知らせなさい。21それからあなたは、すべての民の中から有能な人、神を畏れる人、誠実な人、不正な利益を憎む人を選び出し、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長として民の上に立てなさい。22ふだんは彼らに民を裁かせ、大きな問題が生じたときだけ、あなたのところを持って来させ、小さな問題はすべて、彼らが裁くのです。こうしてあなたの負担を軽くし、彼らもあなたと共に分担するのです。23もしあなたがこのやり方を実行し、神があなたに命じてくださるなら、あなたは任に堪えることができ、この民も皆、安心して自分の場所に帰ることができるでしょう。」

24モーセはしゅうとの言葉を聞き入れ、すべて言われたとおりに行った。25モーセは、全イスラエルの中から有能な人々を選び、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長といった民の頭として任命した。26ふだんは彼らが民を裁き、難しい問題はモーセのところを持って来たが、小さなことはすべて、彼ら自身で裁いた。27モーセはしゅうとを見送り、しゅうとは自分の地に帰って行った。

## 使徒言行録 16章6～15節

6さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。7ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入るうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。8そ

れで、ミシア地方を通してトロアスに下った。9その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、私たちを助けてください」とパウロに懇願するのであった。10パウロがこの幻を見たとき、私たちはすぐにマケドニアに向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神が私たちを招いておられるのだと確信したからである。

11私たちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスに着き、12そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民市であるフィリビに行った。そして、この町に数日間滞在した。13安息日に、私たちは町の門を出て、祈りの場があると思われる川岸に行った。そして、そこに座って、集まっていた女たちに話をした。14ティアティラ市出身の紫布を扱う商人で、神を崇めるリディアという女も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。15そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、その時、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言って、無理やり招き入れた。

## ルカによる福音書 5章1～11節

1群衆が神の言葉を聞こうとして押し寄せて来たとき、イエスはゲネサレト湖のほとりに立っておられた。2イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。3イエスは、そのうちの一そうであるシモンの舟に乗り込み、陸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。腰を下ろして舟から群衆を教えられた。4話し終わると、シモンに、「沖へ漕ぎ出し、網を降ろして漁をしなさい」と言われた。5シモンは、「先生、私たちは夜通し働きましたが、何も捕れませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。6そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。7そこで、もう一そうの舟にいた仲間に合図して、加勢に来るように頼んだ。彼らが来て、魚を両方の舟いっぱいにしたので、二そうとも沈みそうになった。8これを見たシモン・ペトロは、イエスの膝元にひれ伏して、「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間です」と言った。9とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。10シモンの仲間、ゼベダイの子ヤコブとヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」11そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・1月15日「公現後第2主日」の日課主題は「最初の弟子たち」。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、エジプトを出てシナイ山に至るまでの最初の荒れ野の旅路でモーセが民を治めるための組織を整えたことを描く箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、使徒パウロがバルナバ宣教団から独立して組織した宣教団を従えて新しい宣教地マケドニア州を目指し最初に訪れたフリピでの活動までを物語る箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスがガリラヤ湖で漁師たち4人を弟子として従えられたことを伝える箇所。

**旧約日課(出エジプト18章より)**

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典「律法」の第二巻、「申命記」まで続く「モーセ物語」の最初の巻。「モーセ誕生譚」から始まり、「モーセの召命譚(柴の箇所)」、「十の災いの逸話」、「初子の災いからの過越しとエジプトからの逃避」、「シナイ山までの荒れ野の旅」、「十戒授与とシナイ契約」、「幕屋建設の指示と実行」、「金の雄牛像と十戒の再授与」が展開される。最後の「金の雄牛像と十戒の再授与」は、「幕屋建設の指示と実行」の途中に組み込まれているが、他の要素は順次描かれている。日課箇所は、「シナイ山までの荒れ野の旅」の中に含まれる逸話の一つ。

・日課箇所を含む「シナイ山までの荒れ野の旅」は、葦の海を渡ってエジプトの追走から逃れた民が、神から水を与えられ(15:22 以下および 17:1 以下)、食物としてマナを与えられ(16章)、民を率いる制度を整えて(18章=日課箇所)、シナイ山に至るまでを描く。いわゆる「荒れ野の四十年」を描く「レビ記」および「民数記」と重なり合う主題を含むが、より重要な視点は、これが「シナイ契約」(19章以下)の前に置かれていることであろう。「出エジプト記」の構成によれば、エジプトを出発した民は、いわゆる「イスラエル」だけではない「種々雑多な人々」を含む集団であるが、「シナイ契約」によって「主の律法」を聞き行こうとして応答する「神の民イスラエル」の枠組みをアイデンティティとして与えられる。「シナイ契約」が、この後の旧約諸文書における「イスラエル=神の民」を定義づけるものとして機能させられる。ここで見落としてならないことは、「シナイ契約」で応答誓約をするまで、「民」は何ら義務的な責任や態度を要求されていないということである。まず「過越し」(12章)が、「初子の災い」から神が一方的に除外する者らのしるしとして提示される。エジプトを出た民を追走するエジプト軍から逃れるために、葦の海は、無条件に開かれる(14章)。荒れ野の旅で水や食物を必要とする民に、神は無条件に水やマナを与えられる(15~17章)。これら恵みの一方的授与という神の姿勢は、民の先頭としんがりに「火の柱」および「雲の柱」がそびえることによって常にしる

づけられる。このように、モーセに導かれた民は、シナイ山に到達するまで、ただ神の恵みに浴し続け、その上で彼らは、「十戒=律法授与に対する応答と誓約」を促されるのである。

・この「神の恵みの一方的な授与」が強調される「シナイ山までの荒れ野の旅」の中で、一種独特の色彩を放つのが、日課箇所の「しゅうとエトロの来訪と民の組織化」を描く逸話である。モーセは、アロンと共に民を導くよう使命を与えられているが、しゅうとエトロは、モーセが負いきれないものを背負い込んでいるとして、モーセに代わって働きを担う者たちを組織し、働きを移譲するよう助言している。

・「しゅうとエトロ」は、モーセがエジプト人を殺した後に逃亡した先で受け入れてくれた「ミディアン」の祭司として2~3章に描かれているが、そこでは「レウエル」の名もある(2:18)。モーセは、「ミディアン」の祭司一族の娘と結婚し、この一族と婚姻関係を結んでいた。「ミディアン人」は、「創世記」によればアブラハムとケトラの間に生まれた子の一人を始祖とした人々で(創25:4)、遠縁ではあるが同族の人々。すると、彼らの神も「アブラハムの神」であると考えるのが自然な見方となる。つまり、モーセは、エジプトでヘブライ人(=ヤコブ=イスラエルの末裔?)として生まれながらファラオの王家で育てられたという点で完全に「アブラハムの神」から遠ざけられていたのであるが、同族の「ミディアン」の祭司に受け入れられることによって「アブラハムの神」を知るようにされ、自らのルーツである「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」からの召命を与えられた、ということになる。そこで、モーセがエジプトから導き出した民を組織化する上で規範となり得るのは、「アブラハムの神」にルーツを持つ「ミディアン」の祭司である「しゅうとエトロ」の助言のほかにはありえない、という理屈が成り立つのであろう。

**使徒書日課(使徒16章より)**

・「使徒言行録」の総論については、前週資料「聖書と祈りの会 230104」も参照。「使徒言行録」は、エルサレムの「使徒たちの教会共同体」から名代として派遣されたバルナバを指導者とするアンティオキア教会から派遣された宣教団に加えられていたパウロが、そこから離れて独自の宣教活動を進めるも、最終的に「使徒たち」の諸「教会共同体」と調停的な立場を取り、ペトロの指導下にあるローマの教会共同体を目指すという構成で展開する。そこで、パウロをめぐる生じていたであろう諸々の軋轢について必ずしも明瞭に描くことなく、最終的な「一致」に向けて神が聖霊をもって働きくださった過程として描写を展開する。

・日課箇所は、パウロがバルナバ宣教団から独立した直後、アジア州での宣教が禁じられて、新しい宣教地マケドニアを目指した経緯が描かれている。アジア州の中心都市エフェソには、早い段階から教会共同体が形成されていたと考えられ、パウロは独自の活動を進めるにあたって、既存の宣教地での活動を止めら

れていたであろう。それは、競合を避けるためであったかもしれないが、パウロ自身がアジア州に近いキリキア州タルソス出身で、この地域のユダヤ人社会およびローマ社会に少なからぬ影響力を行使しうる立場にあったからかもしれない。

・「フィリピ」は、古代マケドニア王によって前 4 世紀に創建された都市であるが、ローマの支配下に置かれた後、帝政時代には退役軍人の入植が大規模に進められた。紀元 1 世紀当時のユダヤ人の居住実態は不詳であるが、「使徒言行録」の記述からは、ユダヤ人が安息日ごとに集まる「会堂」が十分に成立していなかったと推認され、パウロは少数のユダヤ人と異邦人を対象に宣教活動を行ったのみであった。

### 福音書日課(ルカ 5 章より)

・日課箇所は、4 人の漁師たちを弟子として従えられたいわゆる「召命記事」で、「共観福音書」が共通して伝えている内容とみなせるが、状況描写は「マタイ」および「マルコ」と大きく異なり、「大漁の奇跡」の逸話が置かれている。「大漁の奇跡」の逸話は、「ヨハネ福音書」が、主イエスの復活顕現伝承として最後に付加した逸話に酷似している(ヨハネ 21 章参照)。

・この漁師たちの「召命記事」は、前段として彼らがまず、主イエス一人でなされていた宣教活動の協力を求められて舟を貸したという状況から描かれている。主イエスが舟に乗って岸辺の群衆に教えられたことは、「マルコ福音書」でも伝えられている(マルコ 3:9、同 4:1＝マタイ 13:1)。このような段階を経て漁師らが弟子として従うようになったという描き方は、より一般化された召命物語として理にかなっているのだろう。

### 来週の誕生日 (1 月 15 日～21 日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

・21-356 番「インマヌエルの主イエスこそ」(＝ I 161) は、作詞者アレンドルフは、18 世紀ドイツの牧師で、敬虔派詩人として知られ、J.S. バッハと入れ違いにケーテン宮廷説教者としても務め『ケーテン讃美歌集』を編纂。その中の一曲で、作曲者は不明。

・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツで毎年行われている全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讃美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讃美歌。

・21-531 番「主イエスこそわが望み」(＝ I 358「こころの世にあれど」)は、8 世紀頃のアイルランドの修道院に遡るとされる古いアイルランド語讃美歌で、20 世紀初頭に英訳されたアイルランド民謡集に収録されてから英語圏で広く讃美歌集に採用されるようになった。『讃美歌 21』では英語 3 節版に基づいて改訳されている。

#### 21-356「インマヌエルの主イエスこそ」

*Einer ist König, Immanuel sieget*

1. Einer ist König, Immanuel sieget! / Bebet, ihr Feinde, und gebet die Flucht! / Zion hingegen, sei innig vergnügt, / labe dein Herze mit himmlischer Frucht! / Ewiges Leben, unendlichen Frieden, / Freude die Fülle hat er uns beschieden.
2. Stärket die Hände, ermuntert die Herzen, / trauet mit Freuden dem ewgen Gott! / Jesus, die Liebe, versüßet die Schmerzen, / reiße aus Angsten, aus Jammer und Not. / Ewig muß unsere Seele genesen / in dem holdseligsten lieblichen Wesen.
3. Halte, o Seele, im Leiden fein stille, / schlage die Rute des Vaters nicht aus; / bitte und schöpfe aus göttlicher Fülle Kräfte, / zu siegen im Kampfe und Strauß! / Fluten der Trübsal verausschen, vergehen; / Jesus, der Treue, bleibt ewig dir stehen.
4. Zion, wie lange hast du nun geweinet? / Auf und erhebe dein sinkendes Haupt! / Siehe, die Sonne der Freuden erscheint / tausendmal heller, als du es geglaubt. / Jesus, der lebet, die Liebe regieret, / die zu den Quellen des Lebens dich führet.
5. Laufet nicht hin und her, eilet zur Quelle! / Jesus, der bittet: "Kommt alle zu mir!" / Sehet, wie lieblich, wie lauter und helle / fließen die Ströme des Lebens allhier! / Trinket ihr Lieben, und werdet erquicket: / hier ist Erlösung für alles, was drücket.
6. Streitet nur unverzagt, seht auf die Krone, / die euch der König des Himmels anbeut. / Selber der Herr wird den Siegern zum Lohne; / wahrlich, dies Kleinod verlohnet den Streit! / Streitet nur unverzagt, seht auf die Krone: / selber der Herr wird den Siegern zum Lohne.
7. O du Lamm Gottes, da, da wird man sehen / eine gewaltige, siegende Schar / deine unendliche Hoheit erhöhen. / Alles, was Odem hat, ruff: / Er ist's gar! Sehet, / wie Kronen und Throne hinfallen; / höret, wie donnernde Stimmen erschallen.
8. Reichtum, Kraft, Weisheit, Preis, Stärke, Lob, / Ehre Gott und dem Lamme, dem Heiligen Geist! / Wenn ich da stünde, o wenn ich da wäre! / Springet, ihr Bande, ihr Feseln zerreiße! / Amen, die Liebe wird wahrlich erhören. / Alles, was in mir ist, lobe den Herren!

#### 21-419「さあ、共に生きよう」

#### Damit aus Fremden Freunde werden

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit: / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / begegnet uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir er sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Eingigkeit uns weist.

#### 21-531「主イエスこそわが望み」

#### Be thou my vision

1. Be thou my vision, O Lord of my heart, / be all else but naught to me, save that thou art; / be thou my best thought in the day and the night, / both waking and sleeping, thy presence my light.
2. Be thou my wisdom, be thou my true word, / be thou ever with me, and I with thee Lord; / be thou my great Father, and I thy true son; / be thou in me dwelling, and I with thee one.
3. Be thou my breastplate, my sword for the fight; / be thou my whole armor, be thou my true might; / be thou my soul's shelter, be thou my strong tower: / O raise thou me heavenward, great Power of my power.
4. Riches I heed not, nor man's empty praise: / be thou mine inheritance now and always; / be thou and thou only the first in my heart; / O Sovereign of heaven, my treasure thou art.
5. High King of heaven, thou heaven's bright sun, / O grant me its joys after victory is won; / great Heart of my own heart, whatever befall, / still be thou my vision, O Ruler of all.